

熊本 県大COC通信

熊本県立大学
COC推進室

平成28年度もやいすと ジュニア・シニア始動!!

一年次の選択必修科目で、約500人が受講する「もやいすと地域／防災ジュニア育成」と、その500人の合意形成や相互理解の支援を通し学修する二年次の選択科目「もやいすとシニア育成」がスタートしました。

熊本地震の影響を考慮し、当初の計画を全て見直すことになりましたが、5月30日に授業の担当教員の津曲教授と堤教授、佐藤特任講師より、もやいすとジュニアの第1回オリエンテーションが行われました。12月の成果発表会に向けて、「復興へ。もやいすとジュニア500人で挑む熊本地震」をテーマに、全学部の1年生約500人が「もやいすと」への一歩を踏み出しました。今年度は、地域ジュニアと防災ジュニアの活動内容が統一され、地域は「コミュニティ支援」、防災は「災害ボランティア」の視点を持って、フィールドワーク（以下、FW）やボランティアへの参加、演習活動等を行うことになりました。



津曲教授による地域ジュニア講義様子

平成28年度もやいすとジュニア育成プログラム

「もやいすと2016」(熊本県立大学復興支援チーム)

1年生約500名が、5人1組の約100チームに分かれ熊本の復興支援に取り組み!

災害に対する学修活動

震災から学び、考える。復興支援学修

オリエンテーション

特別講義

災害支援フィールドワーク等

復興FS/防災演習

成果発表会

復興ボランティア活動

復興へ向けたボランティア活動(任意参加)

復興へ向けたボランティアの情報を提供を実施(各チーム単位)

参加した場合は、「もやいすとポートフォリオ」に記録

まに合意形成とアイデアを生み出す「県立大版フューチャーセッション」の開発を行います。授業の中でジュニアに対し自らが創り出したメディア・ツールを実践することを本授業のゴールとして取り組みます。



堤教授による防災ジュニア講義様子

もやいすと2016の概要

○もやいすと地域／防災ジュニア

全学部の1年生約500人(約100チーム)が、「地域コミュニティ支援」と「災害ボランティア」の視点を持って震災復興に向き合います。前期にオリエンテーションやチームビルディングを行い、任意ボランティア活動への参加、夏課題での震災や防災について学修を経て、後期はフィールドワークや演習活動、発表会への参加とシニアからの支援を通して学修します。

○もやいすとシニア

2年生18人が、ジュニアの学修支援やツール開発を通して、調査スキルやファシリテーション(合意形成や相互理解支援)スキルを学修します。

もやいすとシニアFW 初めて目にする益城の実情

9月10日の午前中、学内において2年生のシニアを対象にFWの事前レクチャーを終え、午後から避難所として利用されている益城町総合体育館の見学と体育館の周辺調査を行いました。体育館では、公益財団法人YMCAの丸目副所長(本学OG)の案内のもと、居住スペースや館外の仮設シャワーなど、施設のことを細かく説明して頂きました。学生からも質問が積極的に飛び交い、避難所における生活・運営両面の大変さを知ることができました。

周辺調査では、シニアの各チームに1人ずつSA(スチューデントアシスタント)の学生が同伴し、予め決めておいた担当地区を見て回りました。被災地を歩くシニアの様子を見ていたSAは、「初めて見た益城の状況に驚いていた」、「ただ歩くのではなく被害がどのようなものかをしっかりと目に焼き付けていた」と話し、「私



激しく隆起した道路を見つめる学生



前震でひび割れ、本震で隆起し凸凹になった体育館玄関付近の様子

たちが住んでいる熊本市と同じ熊本と思えない」とSA自身も驚きを隠せず、震災以降初めて益城に入った学生も多く、沢山の発見や衝撃を受けるプログラムとなりました。

仮設住宅での聞き取り調査

FWの二つ目のプログラムでは、益城町の木山仮設団地(220戸)とテクノ仮設団地(516戸)に分かれて、聞き取り調査を行いました。調査の項目は氏名や被災状況、今後の住まいについてなどで、この調査は益城町が熊本大学(円山研究室)と連携して行うもので同町の復興計画に反映されます。

熊本大学の円山准教授や学生からレクチャーを受けたシニアたちは、3〜4人のグループに分かれて聞き取りを行いました。入居されている方に話を聞く人や、調査用紙に回答を記入する人など役割を決めて活動しました。最初は不慣れな様子でしたが、次第に入居者の方々と打ち解けて、親身になって耳を傾けるシニアの様子が見られました。

今回は熊本大学の学生にサポートを受けて活動を行いました。今後はシニアたちが1年生のジュニアたちをサポートしていくこととなります。このFWを通して、ヒアリング調査の仕方や、仮設住宅で何が不便なのかを住民の方から具体的に話を聞くことができました。今

回の学びをどの様に発展させていくのか、引き続き報告していきます。



仮設住宅での聞き取り調査の様子



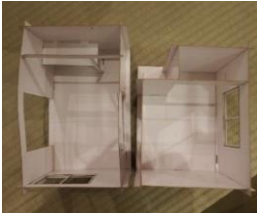
みんなの家で佐藤先生の話聞く学生

仮設のトリセツを学ぶ

当日のFW最後の活動では、本学の環境共生学部居住環境学科の佐藤准教授による『仮設住宅に関するレクチャー』を受けました。県内で最も大きいテクノ仮設団地の「みんなの家」(仮設団地内の公共建物)の中で、仮設住宅の間取りや、住民にとって住みやすい場所にするための方法などについて説明がありました。

仮設住宅に入居が開始されて間もないため、隣近所に誰が住んでいるのか分からないような状況であることや、地域コミュニティを今後どのようにして作り上げていくのか等がまとめられた「仮設のトリセツ」(法政大学デザイン工学部・岩佐研究室作成)を用いて、仮設住宅

部屋の広さを表した模型



仮設住宅は空間をうまく利用する必要があります



仮設住宅での暮らしに関する解説書

において、今後どのようなことができるのかを考えました。シニアたちは真剣な眼差しで一生懸命メモを取り、質問をしながら話を聞いていました。「仮設住宅の支援は建築に詳しい人以外にもできることが沢山ある」という佐藤准教授からの話を聞き、「仮設の支援に関わってみたい」と感想を述べる学生がいました。

丸一日に渡る活動を終了し、振り返りの課題を提出したシニアたちは、ジュニアの授業の中で今回の活動を報告します。そして、10月からはシニアは課題解決ツールについて学修し、独自の「クロスロードゲーム（災害に関する意思決定ゲーム）」と「フューチャーセッション（未来志向の対話型ワークショップ）」を開発して、講義の中でジュニアに向けて実践することになります。

12月24日に予定している発表会までの3か月間、シニアとジュニアがどのような学修に取り組み、熊本地震からの復興に引き合っているのか、今後、もやいすとジュニア・シニアの活動を紹介していきます。

熊本地震での体験や想い、これからの共有するフューチャーセッションを開催

地震から10日後の4月27日、地震直後に避難所運営に携わった学生リーダー約20人と被災プロジェクトとCOC推進室のメンバー等が集まり、「震災の初動対応を考える学生と教職員のフューチャーセッション」を開催しました。避難所運営に携わった学生らは、熊本市ボランティアセンター運営のスタッフとして活動しており、記憶が薄れる前に避難所の運営や学生らの行動を記録し、集まった情報を整理するなどして、今後の防災への取り組みに活かしていくことを確認しました。



避難所運営時の活動を振り返る学生



活動記録を確認する教職員と学生

5月20日、111教室において、総合管理学部のKUMAJECT（人吉球磨地域の活性化を目指す自主研究組織）を中心に、環境共生学部や文学部を含めた15人の学生で、「私の熊本、私たちの熊本」をテーマに、「未来志向型ワークショップ「フューチャーセッション」

を開催しました。震災発生から約一ヶ月間の各自の行動や体験を対話し、それぞれがどのような想いや課題を抱き、これから何に取り組みたいのかを共有しました。



地震後の活動の振り返りの様子

学生の中には、本学をはじめ小中高の避難所運営に携わった人、様々なボランティアに参加し近所住民の支援を行っていた人、自宅の復旧や家族との時間を大切にしていた人など、震災時にどのような時間があつたのかを語り合いました。その際、参加者が円になって座り語るサークルや、じっくりと対話を深めるペアトーク、体験談を印象的に語るストーリーテリングの手法を用いて、互いの想いを共有し課題を掘り下げました。

次に、これからの熊本のために取り組みたいアイデアを書き出した紙を全員が持って、似たアイデアや組み合わせたいアイデアを持つ仲間を探しグループを組むマグネットテーブルという手法でアイデアを収束した結果、全体が2つのグループに分かれました。各グループにて、具体的なアクション・プランを作るビジネスモデル・キャンパスを行い、どのような人や組織を巻き込み、資源は何かあ

り、どのようにプランを具体化し、どのような影響が考えられるのか検討しつつ、アクション・プランを完成させました。最後に発表を通して全体でプランを共有しました。

生まれたアクション・プランの1つは、「ボランティアカフェ」と称して、ボランティア活動のプラットフォームを学内で運営する計画で、運営しながら地域からの支援要望を整理し、学内や他大学のボランティアグループへのマッチングや、学生同士が交流できる場づくりを行う内容です。2つ目は、ボランティア活動に参加したくても参加できない子どもやその家族と、農繁期であるにも関わらず人手の確保が困難な農家への支援に着目し、親子農業体験ツアーとして、農業ボランティアを募り、派遣するというアイデアです。いずれも震災後1ヶ月を通じて、学生たちが感じた地域の課題や矛盾、ニーズを突き詰めて考え出したアイデアで、正にCOC事業が学生に求めている課題解決プロセスだと言えます。発表後、KUMAJECTを統括する総合管理学部の上拂教授と地域連携・研究推進センター職員やCOCのスタッフが講評を行いました。

なお、今回のセッションは学生からの提案がきっかけで実現しました。同じ学内にいる学生がバラバラに取り組む活動を共有し、次の一歩に繋げていけないかと考えたからです。現在も参加した学生たちは活動を継続し、学修や行動

のモチベーションへと繋がっています。セッション終了後、再度サークルを作り、セッションの感想や気付きを一人一人発表しました。学生によるこのような取組みが、学内へ広がり始めています。

約3時間に及ぶ未来志向の対話を通して生まれたアイデアの実現に向けて学生が行動し始め、学生ボランティアステーション立ち上げの契機となりました。各活動の今後の展開が期待されます。



セッション後の記念撮影

地域志向教育研究事業14件採択

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の取り組みの一つとして、教員が地域課題の解決や社会貢献につながる教育研究テーマに主体的に取り組む「地域志向教育研究事業」を進めています。今年度は、熊本地震により大きな影響を受けたことから、震災に関連する地域課題や政策課題をテーマとした研究を重点的に支援し、本学の教員の専門性と連携を生かして、熊本の復興に積極的に貢献していきたいと考えています。

平成 28 年度 地域志向教育研究事業一覧

No	所属	職名	研究責任者	研究テーマ	対象自治体
1	総合管理学部	教授	三浦 章	県内市町村における人材育成推進のための研修制度の構築について -課題解決能力及び非常時対応・危機管理能力を備えた職員の育成-	熊本県
2	総合管理学部	教授	丸山 泰	震災復興・地域活性化を目指す【県産農・パートナー強化推進事業】への 学生参画による実践型教育研究事業	熊本県
3	総合管理学部	教授	森 美智代	震災後の地域産業の創生 -農事組合法人の現状と課題-	熊本県
4	総合管理学部	教授	上拂 耕生	人吉球磨の地域活性化プロジェクト	熊本県
5	総合管理学部	准教授	澤田 道夫	被災地における組織運営のあり方 -熊本地震における公民協働-	熊本県
6	総合管理学部	准教授	小園 和剛	熊本県南地域産品・加工品輸出に関するグローバル志向の人材育成と 情報発信プラットフォーム構築による地の拠点整備	熊本県
7	総合管理学部	准教授	山西 佑季	震災復興と総合管理 -熊本地震を機とした総合管理型教育の推進-	熊本県
8	環境共生学部	教授	南 久則	熊本地震後の管理栄養士の医療・保健・福祉・教育分野における 活動に関する調査・研究	熊本県
9	環境共生学部	准教授	柴田 祐	集落の復興に向けた記憶の記録「集落の復興カルテ」に関する研究	熊本県
10	環境共生学部	准教授	田中 昭雄	大空間避難所施設の居住快適性と災害避難施設のライフライン強靱化と その定置評価に関する研究	熊本県
11	環境共生学部	准教授	佐藤 哲	住まい力を育てる住教育の実践と教材開発	熊本県
12	環境共生学部	准教授	阿草 哲郎	熊本地震による緊急環境汚染調査	熊本県
13	環境共生学部	准教授	高橋 浩伸	天草市観光振興の拠点づくりに関する研究 -海の道の重要拠点としての「鬼地港」の再生計画-	天草市
14	環境共生学部	准教授	友寄 博子	晩白柚の糖質吸収に及ぼす影響	八代市

今年度選定された「地域志向教育研究事業」の研究課題数は14件、このうち震災に関連する課題は10件です。震災関連の研究課題に取り組む教員の数は約30人にのぼり、相互に連携を図りながら、教育研究活動を進めていくこととしています。COC事業では、避難所運営における学生ボランティアの主体的かつ献身的な活動を踏まえ、もやいすと育成プログラムをはじめとする教育活動と、教員による地域を志向した研究活動の両面に積極的に取り組み、震災に起因する様々な地域課題の解決に貢献し、熊本の復興を後押ししていきたいと考えています。